▲枚田水石筆「古河城涼櫓眺望図」

ため、以後「水石」に改めたといいます。

水石は、師の文晁の骨法をよく学び、山水四君子を得意として、特に墨竹に大変優れていました。「其の画く所よく写生を脱化し、落筆凝滞なく、竹幹竹葉共に其の姿態を保ち濃淡亦調へり。嘗て人に聞く。文晁は甚だ水石の墨竹を愛し、自ら其の画幀に向つて落欵を施せること屢ありしと。蓋これ水石の墨竹に堪能なるを賞したるの言なるべし。」(同上)と、墨竹に定評のある画家であったことがうかがえます。また、「為人質直慷慨」と墓碑にあるように、師の筆意筆法に倣った、実直ともいえる水石の作風は、その人柄が反映されたものといえるかもしれません。

利位が老中を務めているころ、用人であった水石は、江戸で多くの文人墨客に接する機会も多く、福田半香、椿椿山、岡本秋暉などの著名な画家とも親しく交流したと伝えられています。

嘉永の頃、水石は多年の功労を賞されて刀一口を賜り、古河に戻ります。その後も古河の地で筆をとり画技の研鑽に努め、得意の墨竹をはじめ多くの作品を描いています。文久3(1863)年8月14日、病により68歳で亡くなりました。

水石と弟子・晴湖

冒頭のとおり、水石晩年の門人には池田せつ、後の奥原晴湖がいました。古河での修業時代、晴湖は、池田家の親戚にあたる水石から南北合派の絵画を学び、師から「石芳」という号を与えられています。また、晴湖は古今内外の名画を模写することによって画技を錬磨したといわれますが、それには水石がもたらした粉本類が大いに役立てられたものと思われます。

晴湖の晩年の回顧談によると、師の水石のことを「崋山、杏所等に就いては余程調べて居り学者でしたが絵は下手でした。」(『書画骨董雑誌』36)などといったようですが、一方「当時の女史(晴湖)も、竹の図には可なり自信があつたと見へ。『江戸に於ても、竹は誰にも譲り不申、之れ一に水石先生の御蔭と存じ……』(後略)」(稲村量平編『奥原晴湖』)と古河の父親宛に消息したと伝えられるように、水石は晴湖の画業に影響を与えた人物だったといってもよいでしょう。

『雪華図説』を著した藩主の利位をはじめ、その補佐にあたった鷹見泉石などはすでに知られていますが、古河藩には、水石のような余技に秀でた文人気質の藩士が、たくさん存在したのでした。

古河歴史博物館学芸員　倉井直子

◀枚田水石の墓「雲林院殿濃淡水石居士」(古河市指定文化財)

※次号(平成28年4月号)は休載します。